

熱砂ねつさの凶王と眠りたくない王妃さま

## ニルファール

バフムドの愛娘。  
聡明な絶世の美女で、  
以前、シャラフとの  
縁談があった  
らしいが……

## バフムド

ウルジュラーンの隣国の王。  
豪快で気風がいいのだが、  
短慮なところもある大男。

## シャラフ

大国ウルジュラーンの若き王。  
大改革を行ったため  
残虐な王と噂されている。  
しかし実際は  
公平で有能な青年。

## 登場人物紹介

## カルン

シャラフの乳兄弟で、  
将軍職を務めている。  
いつも明るく  
気のいい青年。

## スイル

シャラフの乳兄弟の  
軍師。カルンの兄  
でもある。常に冷静  
沈着な切れ者。

## パーリ

ナリーファの側仕え。  
快活で気が利く少女。  
ナリーファのことが  
大好き。

## ナリーファ

小国の第八王女。  
早くに生母を亡くし、  
不遇な生活を送っていた。  
謙虚で優しい心の  
持ち主。

## プロローグ

何も見えず、音も聞こえない。

真つ暗闇の中で、ナリーファは途方に暮れていた。

一体、どうして自分がここにいるのか、まだ六歳の彼女にはまったくわからない。

後宮の支配者である、父の正妃メフリズに突き飛ばされたのは覚えている。それから、ふと気づいたらここにいた。

怖かったけれど、ナリーファは口を引き結んで嗚咽を呑み込んだ。

(泣いちゃ駄目。もしメフリズ様に聞かれたら、また酷い目にあわされる……)

ナリーファはミラブジャリード国王の正式な娘——第八王女だが、あまり恵まれた生活を送ってはいない。

父王はすぐ新しい寵姫に目移りする人で、踊り子だったナリーファの母を十何番目かの側妃にしたものの、彼女が産んだ娘ともども顧みる事はなかった。

それでも、ナリーファを深く愛し育ててくれた母が存命の頃は、後宮の隅でひっそり暮らす生活ながらも幸せだった。

けれど、母は半年前に急な病で亡くなり、以来ナリーファは、正妃メフリズに虐げられる日々を過ごしている。

メフリズは、踊り子など誰にでも媚びを売る卑しい女だと、母が生きている頃から何かと彼女を目の敵にしていた。そしてナリーファについても、下賤な血を引く娘であり王女の身分など似つかわしくないと、事あるごとに詰るのだ。

ミラブジャリードの後宮では、息子を王太子に定められたメフリズが絶対的な権力を有し、彼女に逆らえる者はいない。

ナリーファにこっそり優しくしてくれる使用人も少しはいるけれど、大抵の者は正妃の機嫌を取ろうと、末席の王女へ冷たく当たる。

だから、大声で助けを求めても無駄だと、子どもながら冷めた考えもあった。気絶している間に、メフリズの命令でどこかに閉じ込められていたのなら、誰も助けてはくれない。

(母様……お願い、どうか私の傍に帰ってきて……)

無理は承知で、そう願わずにいられなかった。寂しさに耐え兼ね両目に涙が浮かんだ、その時。ナリーファの滲んだ視界の端に鮮やかな緋色が映り込んだ。

——闇の中から、緋色の美しい蝶が一匹、ひらひらと飛んでくる。

(……母様?)

なぜか自然とその言葉が浮かび、ナリーファは蝶へ駆け寄った。

## 1 千夜の語り部

——十二年後。

岩山だらけの荒地と灼熱の砂丘がどこまでも連なる、広大な砂漠地帯。

この不毛の大地にも、オアシスに寄り添い、大小の国が幾つも点在している。

厳しい環境下でも、人は僅かな耕地で作物を育て荒野の獣を狩り、砂漠を横断し交易を行い、逞しく生きるのだ。

そんな国々の中で最も大きな国が、ウルジュラーン王国だった。

砂漠地帯の国々は殆どが一夫多妻制で、王宮には王の妃や寵姫が住む場所——後宮がある。

ウルジュラーンの王宮も、広大な敷地内に豪華絢爛な後宮を持ち、そこには王の寵愛を求める大勢の美女が住まわっていた。

ある暑い夏の日。

ウルジュラーンの後宮に、砂漠の東端にある小国ミラブジャリードより、第八王女のナリーファが寵姫として贈られてきた。

(なんて立派な後宮なの……)

ナリーファは後宮の案内をする女官について歩きながら、無礼にならないようにそつと辺りを眺めた。

ほんの少しだけ入った王宮の本殿も素晴らしかったが、後宮も言葉にし尽くせないほど美しい、贅を凝らした建物だ。

広い回廊の床は磨き抜かれた大理石で、壁やアーチ型の天井は優美なフレスコ画に彩られている。回廊から見える中庭も見事だ。細い人工の小川が流れ、絶妙な配置で植えられたオリーブやナツメヤシの木が涼し気な木陰をつくり、花壇には手入れされた花が鮮やかに咲き誇っている。

寵姫らしき何人もの美女が庭を散策し、木陰のベンチで談笑するなど、楽しそうに過ごしていた。皆、十代から二十歳そこそこの年齢だろう。丁寧な化粧を施した彼女達は一様に美しく、華やかな服装をしている。

回廊のすぐ近くにあるベンチでお喋りをしていた三人の寵姫が、ナリーファに気づき、近寄って来た。

「ねえ、そちらの方はどなた？」

寵姫の一人がナリーファを眺めつつ、先導する女官へ声をかけた。

「こちらはミラブジャリードよりお越しになった、第八王女のナリーファ様です。陛下の寵姫となられましたので、本日より後宮にお住まいになります」

女官が足を止めて肅々と答え、ナリーファにも彼女達を紹介する。

いずれもミラブジャリードより遙かに裕福な国の王女や、ウルジュラーンの重臣の娘だった。

「宜しくお願いたします」

緊張しながらナリーファが挨拶をすると、寵姫達は優しく微笑んだ……が、目は欠片も笑っていない。

「ミラブジャリードなんて、随分と田舎……いえ、遠くからいらつしやったのね。お母様が辺境出身の貴女なら、さぞお話が合うのではなくて？ 羨ましいこと」

一人が傍らの寵姫に言うと、声をかけられた相手は口元に笑みを浮かべたまま眉をピクリと震わせた。

「残念ですけど、母の生家へ行った事はごさいませんの。ですが、貴女よりも言葉遣いに気を付けておりますから、どなたとも気持ち良く話せる自信がありますわ」

「お二人とも、それくらいになさいな。まるで争っているように見えますわよ」

にこやかながら棘のある会話をする二人を、一番年長らしい寵姫が苦笑して窘めた。

「誰がシヤラフ様の正妃の座を目当てにいらつしやっても、わたくし達を含め、ここに住まう皆様は、優しく歓迎しますわ」

向けられた声と表情は柔らかだが、彼女の目が一番残酷そうな光を湛えている。

「正妃など……私は、そんな大それた望みを抱いては……」

ナリーファは背筋を震わせ、消え入りそうな声で返答した。

後宮に入る寵姫の身の上は、高貴な姫から、献上品の女奴隷まで様々だ。そして国王の代替わりと共に、後宮の女性達は一新される。

現在のウルジュラン国王は、シャラフという。年齢は確か二十二。十八歳のナリーファよりも四歳上だ。

昨年に即位したばかりの彼は、苛烈な『熱砂の凶王』として、砂漠にその勇猛さと残酷ぶりを轟かせていた。

この国では長男が王位継承権を持つが、王の血を引く者ならそれに異議を唱え、長男に王座を賭けた真剣試合を挑む事ができるという。

彼らは、大抵は部下を代理人に立てて戦わせる。それで代理人が勝てば、強靱な勇者の忠誠を得る偉大な王と見なされるからだ。

末子だったシャラフは、異母兄全員に決闘を申し込み、代理人すら立てず自力で勝ち抜いた。

そのせいだろうか、玉座のために異母兄弟を皆殺しにし、即位後も自分の政策に逆らった家臣達を容赦なく処刑した残酷非道な男だという噂がたちまち広がったのだ。

強者は恐れられる反面、多くの者達にすり寄られるのが世の常だ。

シャラフの即位祝いにと、家臣や近隣の王はこぞつて娘を贈った。おかげで前王の崩御により一時期空になったウルジュランの後宮には、たちまち多くの美姫が揃ったのだとか。

今も各地から美しい女性が贈られ続けているのだが、熱砂の凶王はまだ誰一人として、正式な妃にはしていないそうだ。

事前に聞かされたシャラフの噂を思い出していたナリーファは、心の中で呟く。

(……正妃など、本当に望むはずもないわ。そもそも私は、きつと陛下を怒らせて殺されてしまう

からと、メフリス様に無理やり寄越されただけなもの)

ナリーファのおどおどした態度に、寵姫達はそれ以上の牽制は必要ないと思ったのか、上品な笑い声を上げながらベンチに戻っていった。

解放されたナリーファは、先を促す女官の後についてまた歩き出したが、胸中で深々と安堵の息を吐く。

(良かった……。あんなに綺麗な女性が大勢いるなら、陛下は私に夜伽を命じるどころか、顔を見ようともなさらないでしょうね)

先ほど、本殿でシャラフに挨拶を述べたのは、ナリーファを連れて来たミラブジャリドの使節だけだった。ナリーファは控えの間で待ち、調見が終わるとそのまま後宮へ案内されたのだ。

もしシャラフが献上された女に興味があれば、その場で調見室に呼んで顔を見たはず。

特に美しいという評判もない小国の王女など興味はないが、とりあえず礼儀で受け取っただけとあったところかもしれない。

本人はちっとも自覚していないけれど、実際のところ、ナリーファは非常に美しい娘だ。

目鼻立ちの整った卵型の顔に、上質な黒曜石を思わせる綺麗な黒い瞳、腰まである真っ直ぐな髪は絹のように艶やか。肌は滑らかな淡褐色で、薄紅色の衣装をまとった身体は、細身ながら女性らしい優美な曲線を描いている。

とはいえ、冷笑と罵倒ばかり受けて育った彼女は、自分の容姿は他人から高く評価されないと信じ切っていた。

(それにしても、後宮なのに男性の衛兵がいるのね)

少しだけ気が楽になったナリーファは、各所に立っている筋骨逞しい衛兵をチラリと見た。

王の寵姫や、その娘である王女達が暮らす場所だけに、後宮は規律が厳しい。通常は衛兵も男性としての機能をなくした宦官で担うものだが、厳つく真面目そうな衛兵は髭があり、宦官には見えない。

不思議に思い、先導する女官に尋ねかけたが、結局やめた。余計な事は言わず、ただ従うというのが、ナリーファの骨身に染みついた生き方だ。

(このやり方がどうであれ、私は息を潜めて生きるだけ……)

そんな事を考えながら歩いていると、女官が足を止めてある部屋の扉を開いた。

「こちらがナリーファ様にお使いいただくお部屋になります」

「え……ここが……？」

中に入ったナリーファは思わず声を漏らす。そこは、可愛らしい調度が整えられた居間だった。

二間続きとなっており、室内の扉で隣の寝室と繋がっているようだ。

「申し訳ございません。お気に召しませんでしょうか？」

女官に心配そうに尋ねられ、ナリーファは急いで首を横に振る。

「いいえっ！ まさか、このように立派なお部屋をいただけるとは思わなくて……」

後宮では大抵、身分が高い者の部屋ほど建物の奥になり、最奥が正妃の部屋だ。

その手前が、王の子を産むか、正式な求婚をされた側妃達の部屋となる。普通、入って間もない

寵姫はもつと小さな部屋か、数人の相部屋を与えられるものだ。

「ここで暮らされる以上、どうかナリーファ様も心にお留めおきください。陛下は後宮の女性が争うのを大変お嫌いになります。ですから過分に女性を集める事もなく、ここへおいでになった寵姫様には、どなたにも同じ広さの部屋をご用意させていただきます」

周囲には誰もいなかったが、人の良さそうな女官は声を潜めて続けた。

「先代陛下の頃から後宮を取り仕切っていた宦官一同は、陛下が禁じたにもかかわらず、寵姫様達から嫌がらせなどを金銭で引き受けていたので、残らず解雇されました」

「では、こちらの衛兵が男性なのは、そのためだったのですか」

「左様にごさいます。陛下は信頼を置く兵に警備を任せ、寵姫様達の世話役は侍女のみとし、目に余る争いを繰り返す寵姫様は、どなたといえども後宮を出すと公言しておられます」

「……はい。心得ました」

ナリーファは素直に頷いたものの、意外だった。

何しろナリーファの聞いている、シャラフの女性に対する評判は酷いものだ。

自分好みの女を次々と集めるわりには一晩で飽きてしまい、二度と閨を訪れない。それどころか、少しでも気に入らなければ容赦なく殺して楽しむ……。そんな噂が、ミラブジャリードにまで流れている。

だから、ここで生き残れる寵姫など、強力な後ろ盾のある姫君か、よほど魅力的な美女だけだと思っていた。

でも、この女官の話では、シャラフはやたら女漁りをするわけでもなく、後宮で女が争わないようにできるだけの措置をとっているわけだ。噂とは違い、随分と寛大な人に感じられる。

(それに……まさか、こんな有難い事になるなんて！)

熱砂の凶王のもとに送られると知った時は、自分の命運もこれまでと覚悟していたが、王から見向きもされそうもない上に個室を与えられるとは、最高に恵まれている。

これなら『眠つても、誰にも迷惑をかけずに済む』ではないか！

「素敵なお部屋をいただきまして、陛下の御厚意には感謝の言葉もございません」  
パツと表情を明るくして丁寧に礼を述べるナリーファに、女官が顔を綻ばせた。

「それでは今夜、陛下が参られますので、後ほど、支度の侍女を寄越します」

お辞儀と共に告げられた瞬間、ナリーファは足元の床がいきなり抜け落ちたような感覚に襲われる。

「へ、陛下、が、いらつしやるのですか……？、こ、今夜……？」

よろめくのを堪えつつ強張った声を絞り出すと、女官が「はい」と答えた。

「こちらもお部屋と同じく、寵愛を巡っての争いが起きないようにとのご配慮です。新しい寵姫様がいらつしやったら、陛下はその方の部屋を必ず訪れます」

寵姫として後宮に贈られても、王の子さえ産んでいなければ、手柄を立てた臣下などに降嫁させられる事は珍しくない。

それでも、王が一度でも寝所を訪れていれば随分と箔がつく。王に見初められるだけの魅力があ

る女、という目に見えない紹介状になるからだ。逆に、後宮に残っていても、いつまでも王に寝所を訪れてもらえなければ、他の寵姫から物笑いの種にされる。

だから、寵姫になつてすぐに王が部屋を訪ねるといのは、普通ならばとても喜ばしい話だ。普通なら……

——笑いで結構です。お気持ちだけ有難くいただきますので、どうかいらつしやらないくださいと、陛下にお願いできないでしょうか？

そんな本音を口に出す勇氣は、残念ながらナリーファにはない。  
呆然としたまま、退室する女官を見送るしかできなかった。

残酷にも時間はどんどん過ぎていく。ナリーファがここに着いたのは昼過ぎだったのに、あつという間に夕方となつてしまった。

食べ物喉を通る気がせず夕食を断ると、それなら湯浴みをと促された。

部屋には小さな洗面所と浴室まであり、パリーというまだ十三歳の可愛らしい部屋付き侍女が、入浴を手伝ってくれた。癖の強い髪を二つのお団子に纏めた、元気な少女だ。

人に身体を洗われるのは慣れていなくて恥ずかしかったが、ナリーファは湯浴みをし、丹念に身体を磨かれる。

「ナリーファ様、こちらのジャスミンの香油になさいますか？」

仕上げに塗りこめる香油の瓶を何種類も出されても、今までそんな贅沢品をろくに与えられた事



がなかったナリーファは選べず、パリーにおすすめを見繕つてもらった。

「ええ。ありがとう……」

パリーは明るく優しい子で、ナリーファはすぐに彼女が好きになった。

『これから精一杯お仕えますので、宜しくお願いします』と、パリーが笑顔で言ってくれたものの、ナリーファは明日の朝まで生きている自信がない。

気持ちを落ち着かせるといふジャスミンの芳香も大して効果はなく、鬱々とした気持ちを抱えたまま、一人寝室に入る。

小さなランプが室内をほんのり照らす中、回廊に面した扉ばかりに気がいつてしまう。そこは国王が寵姫を訪ねる時だけ使う扉だ。

広い寝台と、着せられた肌の透ける薄絹の寝衣が、嫌でも夜伽を連想させる。幸いにも上着を貰えたので、ナリーファは帯をしつかり巻いて煽情的な寝衣を隠した。

(どうしよう……どうしよう……)

うろろると室内を歩き回すが、この場を逃れる名案など浮かばない。

シアラフが寵姫に対して、噂に聞くような酷い振る舞いをしていなかったにしろ、ナリーファの欠点を知ればどんな男性だって激怒しないわけがない。『あれ』を王にやつてしまったら、斬り殺されても文句は言えないと、我ながら思うくらいだ。

凶王に斬り殺されるのも恐ろしいが、後宮からの脱走は極刑だ。どのみちナリーファには逃げ隠れる勇氣すらなく、恐怖に震えるしかない。

「——ナリーファ様。陛下がいらつしやいました」

若い男性の声と共に扉が叩かれたのは、随分と夜も遅くなってからだだった。

「は、はい……」

上擦った声で返事をすると扉が開かれる。現れた青年を見て、ナリーファは息を呑んだ。

(この方が……)

一目で『熱砂の凶王』シアラフだとわかった。彼が噂に聞く通りの姿だからだ。

若き王は、いかにも砂漠の民らしい褐色の肌をしていた。ツンツンと逆立つほど短く刈った髪はサンディブロンドで、瞳は深緑色をしている。黒髪に黒目が一般的な砂漠地帯では珍しい色だ。

精悍な顔立ちを整っていて、美形の部類と言えるが、剣呑な光を帯びた鋭すぎる目つきが、彼を酷く恐ろしい男に見せていた。

ナリーファは、まるで怒りに滾る手負いの猛獣を前にしたような錯覚に陥った。たちまち顔から血の気が引いていき、足がガクガクと震える。

そんなナリーファを、シアラフはジロリと一瞥すると、回廊に控えているお付きの青年を肩越しに振り返った。

「ご苦労だったな、スイル」

スイル、と呼ばれたのは、黒い長髪を緩く束ねた、線の細い生真面目そうな青年だ。文官用の丈長の衣服を身につけており、年頃はシアラフと同じ程度に見える。

「明朝七時にお迎えに上がります。お休みなさいませ、陛下」

スイルが恭しく敬礼し、丁寧扉を閉めたところで、恐怖で固まっていたナリーファはようやく我に返った。

「つ！も、申し訳ございません！ご無礼を！」

寵姫が国王の前で、挨拶もせず突っ立っているなど無礼極まりない。急いで深く頭を下げる間も、頭上から伝わるビリビリと尖った気配に、全身が震え続ける。

「お前が、ミラブジャリードの第八王女か」

「ナ……ナリーファと申します。陛下にはご機嫌麗しく……」

低い不機嫌そうな声も恐ろしくてたまらず、俯いたまま必死に挨拶を述べようとした。

「ああ、もういい。さっさと寝台上がれ」

ところが彼は鬱陶しそうにそれを遮り、スタスタと部屋に置かれた広い寝台へ向かった。彼は振り返りもせずに着を脱いで椅子の背に放り、白い寝衣姿になる。

まるで、ナリーファの顔など見たくないし、口もききたくないと言わんばかりの態度だ。

小国の王女でも公平に扱おうとわざわざ訪れたのに、際立った美貌もないつまらぬ女だったと、余計不機嫌になったのかもしれない。

王の腰帯に差された剣の、使い込まれた風合いの柄を目にして、ナリーファの背筋を冷や汗が伝う。

「……かしこまりました」

消え入りそうな声で返事をし、処刑台上がる気分で寝台の端にそっと乗る。

しかし予想に反して、シャラフはナリーファを組み敷こうとはしなかった。

それどころか、ろくにこちらを見ないまま、広い寝台の端に横たわってしまふ。

「俺は眠るから、お前も余計な事をしようとはせず大人しく寝ろ」

不愛想に言い放たれ、ナリーファは目を丸くした。彼は、片手で広い寝台の反対側を示し、ナリーファをそちらへ追い払うみたいに手を振る。

——余計な事とは、まさか夜伽の事？

ナリーファのその考えは、どうやら当たりだったらしく、シャラフが言葉を続けた。

「何も馬鹿正直に夜伽をしなくても、俺と一晚過ごしたという事実さえあれば良い。家臣への降嫁を前提にした寵姫によく使われた手口だ。こうすれば純潔のまま好きな相手へ降嫁できる上に、王に見向きされなかった寵姫と、それを娶った男などと後ろ指を差されずに済むからな」

「え……」

啞然としたまま寝台に座り込んでいるナリーファを、シャラフはいつそう顔をしかめて睨んだ。

「だから俺は今夜はお前と過ですが、それだけだ。気の進まない女を抱くほど飢えてはいないし、お前だって義理で抱かれたくなどあるまい？」

「は、はい」

ナリーファが戸惑いながらもぎこちなく頷くと、シャラフは「寝るぞ」と素っ気なく言い、目を瞑った。

だが、彼は顔を閉じたものの、眉根をきつく寄せ、苛立たし気な溜め息を繰り返している。その

様子は、安らかな眠りに誘われているようにほとんど見えなかった。

（お加減でも悪いのかしら？）

ナリーファが困惑して彼を眺めていると、その視線を感じたのかシャラフが目も薄く開き、いっそ苛立たしそうに睨んでくる。

「じろじろ見ていないで早く寝ろ。俺は寝つきが悪いんだ。近くで他の奴に起きていられると余計に眠れない」

「も、申し訳ございません」

慌てて謝罪したが、困り果ててしまった。シャラフがゆっくり眠りたいと言うのなら、ナリーファは同じ寝台で眠れという命令には従う事ができないからだ。

眠ったらきつと、王を酷く不愉快な目にあわせてしまう。形だけ横たわり、眠ったふりをするという選択も無理だ。

ナリーファは横たわって目を瞑ると、どんなに起きていようと頑張ってもすぐ眠ってしまう。

また、寝台ではない場所で眠るにしても、同じ部屋にいるだけでも危険だ。

「それが……ご命令に従いたくは存じますが……」

こんな突拍子もない話を、やすやすと信じてもらえるとは思えない。ナリーファ自身ですら、最初は信じられなかったのだ。

ナリーファをここに寄越したメフリズの真意まですっかり話せば、もしかしたら信じてもらえるかもしれないが……

『つまりお前は、俺を怒らせるためにわざわざ贈られたわけだな？ ミラブジャリード国王は、俺に喧嘩を売っているのか』

こんな風に、余計に怒らせてしまう可能性もある。

シャラフは気に入らない寵姫を容赦なく殺すという噂はあるが、その寵姫を贈った国へ攻め込んだとは聞かない。だからメフリズは、単に女を殺すのを楽しんでいるのだと考えてナリーファを寄越したのだろう。

父王は新しい寵姫を見つける事ばかりに夢中で、政治はメフリズと息子の王太子のやりたい放題だ。外交にかこつけ、ナリーファをここに送るのは簡単だったはず。

（万が一、戦にでもなつてしまつたら……）

ハツと思いつき、青褪めて口を嚙む。

ナリーファが個人的に粗相をしただけならともかく、怒らせるのを期待して送り込まれたと知れば、シャラフの怒りはミラブジャリードに向くかもしれない。

そうなった時に、メフリズや父は自業自得としても、罪もない国民にまでとばっちりが行くのは絶対に避けねば。

「なんだ？ 言いたい事があるのならはつきり言え」

「い、いえ……それが……」

まごついて視線を彷徨わせたナリーファは、こちらを睨むシャラフの鋭い両目を、隈が濃く縁取っているのに気づいた。

もはや、この恐ろしそうな王は、酷く疲労しているのでは……？

そんな突拍子もない考えが浮かび、ナリーファはとっさに姿勢を正して座り直し、両手を敷布に揃えてつく。

「もしも許されましたら、お眠りになりやすいよう、寝物語をさせていただきたく存じます」

元踊り子だった母は、宴席で様々な客と話す機会があったため、面白い話をたくさん知っていたし、語り方も非常に上手だった。それらを聞かされて育ったナリーファは、全ての話を覚えている。とはいえ、それを誰かに話して聞かせた事はない。まして、熱砂の凶王と呼ばれる恐ろしい彼を、寝物語を紡いで寝かしつけるなど無謀な賭けだ。しかし、他の手段は思いつかなかった。

「俺に、寝物語？ 子ども扱いでするか」

「大人とて寝苦しい夜はございます。私の亡き母は寝物語を語るのが得意で、他の側妃様達もたびたび、母に寝物語を求めておりました」

鼻で笑われ、ひるみそうになったが、もう後がないと必死で申し立てる。

「どうかお試しいただけませんでしょうか。私は、語り手としては母に遠く及ばないでしょうが……数だけなら、千夜を超えても語ってご覧にいきます！」

言い終えたナリーファは深々と頭を垂れた。

数だけなら千夜でも語れると言ったのは嘘ではない。

ナリーファは本を読むのが好きだったので、幼い頃に母から聞いた物語以外にも、覚えている話はいくつもある。

さらに物語を読み聞きするだけでなく、自分で思い描くのも大好きだ。

勇敢な王子に悪辣な魔法使い、ランプの精に囚われの姫君、財宝を求めて船乗りになった商人……ナリーファの中で、物語はオアシスの水のように幾らでも湧いて出る。

そうして空想の物語に浸るのが、唯一の心の慰めだったのだ。

俯いたまま、冷や汗を滲ませて返答を待つと、シャラフが小さく息を吐くのが聞こえた。彼が無言でゆつくりと身を起こし、ナリーファの方へ近づくと心配がする。

そして唐突に、砂色の頭部がポスンとナリーファの膝へ載せられた。

「えっ」

驚くナリーファを、膝に頭を載せたシャラフが鋭い瞳で見上げる。

「話してみる。どうせお前が起きていようと眠っていようと、俺は眠れないのだから、たまには趣向の変わった茶番に付き合ってください」

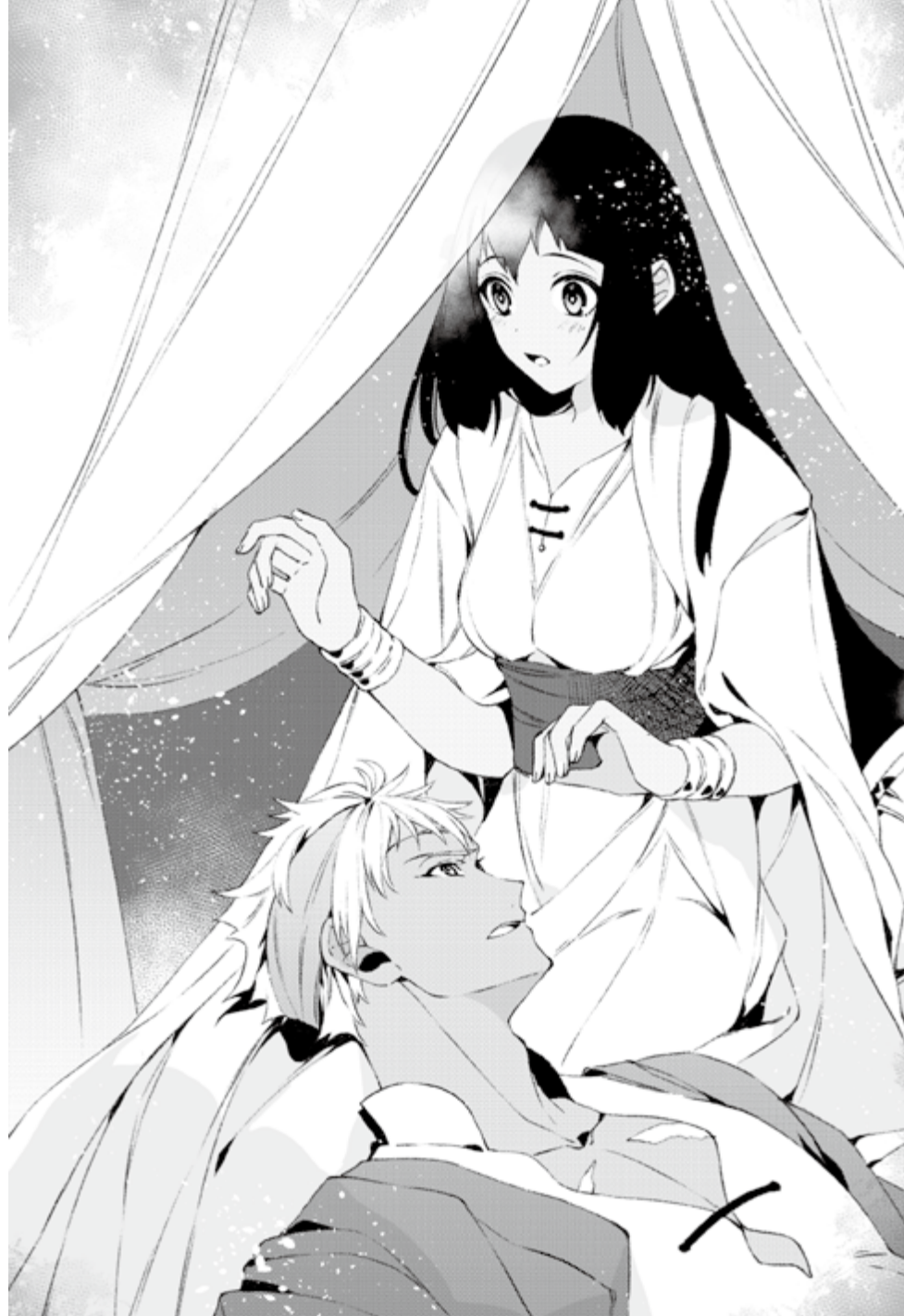
「あ、ありがとうございます。では……」

何を話そうかと一瞬悩んだが、ナリーファは幼い頃、母によくせがんだお気に入りの物語を話し始めた。

それは遠い西の国に昔から伝わるという、短くも楽しい話。

(……母様は私に、形はなくても素晴らしいものを遺してくださいましたね)

母の形ある遺品は、ハンカチ一枚に至るまで全てメフリズに焼かれてしまった。けれど、ナリーファの記憶に残る幸せな思い出までは、誰も焼き尽くせない。



懐かしい思い出に勇気を貰えたのか、いつもは人の顔色を窺いおどした調子でしか喋れないのに、すらすらと物語が口から流れ出る。

シャラフは相変わらず険しい顔つきで、黙って物語を聞き、終わっても無言だ。駄目だったかと、ナリーファは胸中で息を吐いた。

「申し訳ございません。やはり、私ではお耳汚しだったようで……」

すると、シャラフが唐突に目を見開き、肩を震わせる。

「いや……」

低い、やや掠れた声でシャラフが呟いた。

「少し、考え事をしていた……もう一度、今の話をしてくれ」

「かしこまりました」

驚いたが、ナリーファは再び最初から話し始める。

ふと、膝に載せられたシャラフの顔に視線を向ければ、あの凶悪そうな鋭い双眸が、どこか遠くを見つめるようなものに変わっていた。

そして、次第にうつらうつらし出したかと思うと、二度目の物語を話し終えた頃には、シャラフは穏やかな寝息を立てて眠り込んでいた。

（え……眠ってしまったの？ 本当に……？）

今更ながら緊張が舞い戻り、ナリーファは激しく動悸を打ち始めた胸を手で押さえる。

しばらく身じろぎもせずの様子を見ていたが、彼は一向に起きる気配がない。

初めて膝に載せた人の体温と、間近で聞く規則正しい寝息は意外にも心地良いけれど、相手が凶王様だと思うとどうしても緊張する。

その上、何時間も膝枕をしていると、流石に脚が痺れてきた。

ナリーファはプルプルしながら手を目いっぱい伸ばし、なんとかクッションを手繰り寄せて、慎重に自分の膝と入れ替える。

それでもシヤラフはぐっすり眠ったままで、ナリーファはほっとして額の汗を拭った。

ミラブジャリドからここまで、駱駝の引く車で二週間の旅だ。疲れているはずなのに、緊張と思いがけず窮地を切り抜けた高揚感に目がさえ、欠片も眠くない。

安堵の息を吐き、ナリーファは王の寝顔にそっと視線を向ける。

凶暴さや苛立ちの気配などない、心地良さそうな寝顔だった。

(……考えてみれば、陛下はご自分が疲れ切っているのに、押し付けられた私の体裁を繕おうとしてくださったから、ここにいらしたのよね)

穏やかに瞼を閉じているシヤラフを眺め、ナリーファは考える。

無慈悲で残虐非道という悪評ばかり聞き、初めて鋭い目つきで睨まれた瞬間は恐ろしくて本当に震え上がった。けれど、彼がそんなに酷い人物とは思えない。

(とにかく、無事に切り抜けて良かったわ。陛下はこれでもう私のもとにはいらつしやらないのだから……)

シヤラフはナリーファが寵姫としての面子を保てるよう一晩だけ一緒に過ごすが、抱く気はまっ

たくないと断言していた。

大勢の美しい寵姫がいるから自分には必要ないなんて、最初からわかっていた事だ。

それなのに、この穏やかな寝顔をこれきり見る事がないと思うと、なぜかほんの少し名残惜しい気がする。

(……今夜はたまたま上手くいったけれど、次もこうなるとは限らない。陛下の訪れがないのは幸いよ)

そう自分に言い聞かせるナリーファは、起こしてしまうかとも思いつつ、またつい彼の寝顔を眺める。結局、シヤラフはぐっすり眠ったままで、目を覚ます事はなかった。

翌朝。

「おはようございます、陛下」

扉の向こうから、昨日のスイルという文官の青年の声が聞こえた途端、シヤラフの両目がバツと開いた。

「っ!？」

跳ね起きた彼は何度か瞬きをして、信じられないものを見るような目でナリーファを見た。

「俺は、眠っていたのか……?」

「は、はい……」

押し殺した低い呟きに、ナリーファは反射的に身を竦める。

「陛下、いらつしやいますか？」

返事がないのを訝しんだのか、スイルが先ほどより少し大きな声をかけてきた。

「ああ、すぐに行く」

シヤラフは扉に向けて答え、寝台から下りる。

身支度を手伝った方が良いのだろうか、ナリーファも急いで寝台から下りたが、シヤラフは上着と靴を自分で手早く身につけ、唐突にこちらを向いた。

「ナリーファ。お前の寝物語は見事だった。……ここに来るのは一晩だけというのは撤回する。今夜も必ずまた、俺に寝物語をしろ」

ナリーファは大きく目を見開いた。今聞いた言葉が信じられず、自分の耳を疑う。

声もなく立ち尽くしていると、シヤラフが眉を軽く擷めた。

「お前は、千夜を超えても話せるのだろうか？」

「っ！ は、はいっ！ かしまりました！」

ナリーファの返事を聞くと、シヤラフは満足そうに口の端を軽く上げ、部屋を出た。

扉が閉まった途端、足腰の力が抜けて、ナリーファは床にへたり込む。混乱する中、初めてシヤラフからきちんと名前を呼ばれたのだと、ようやく気づいた。

「……っふ……う……」

じわりと胸の奥から熱いものがこみ上げ、涙になって両目から溢れ出す。ポタポタと涙が頬を伝い落ち、ナリーファは両手を口に当てて嗚咽を堪えた。

傍で眠りたくない事情を抱えている以上、国王に寝物語をするのは昨夜限りにするのが最良だった。

でも、シヤラフにまた今夜も話せと望まれ、ひたすら嬉しい。

母が亡くなって以来、誰かにきちんと褒められた事などなかった。

『卑しい身分の女から産まれた、政略結婚にも相応しくない無様な王女』と、嘲笑され続けひび割れていた心に、先ほどの不愛想ながらも率直な称賛が優しく沁み込んでいく。

「ナリーファ様、入っても宜しいでしょうか？」

パーリの声がして、居間に続く扉が叩かれる。

「っ……どうぞ」

ナリーファが慌てて涙を拭いて返事をする、着替えの籠を持ったパーリが入ってきた。

「おはようございます」

明るく言ったパーリは、ナリーファの顔を見て急に心配そうな表情になった。

「……？」

ナリーファは首を傾げかけてすぐ、強い眠気を感じてクラリと身体を揺らす。無理もない。昨夜は結局、一睡もしていないのだ。さぞ酷い顔色になっているだろう。

額を押さえて足を踏みしめたナリーファへ、パーリが籠を放り出して手を差し出す。

「大丈夫ですか!? お医者様をお呼びした方が良いでしょう……」

そのまま寝台へ横たわらせようとしてくれた彼女を、ナリーファは慌てて押しとどめた。

今眠ったら、この親切な少女まで傷つけてしまいかねない。

「いえ、少し寝不足なだけで……陛下のお隣では、恐れ多くて眠る気になれなかったの」

「そうでしたか……では、このまま昼頃までお休みになられますか？」

「ええ。そうさせてもらえるかしら」

頷いたナリーファは、パーリが部屋を出ていくと、寝所の内から掛け金を嚴重に締める。

そして寝台に横たわるが早いか、瞼を閉じて眠りに落ちていった……

（——ああ……ここでもやつぱり……）

数時間後。昼の鐘で目を覚ましたナリーファは、寝台を見てガックリと肩を落とす。

敷布はグシャグシャ、掛け布とクッションは床に散らばり、寝衣と上着は帯が緩み肩から半分ずり落ちている有様だ。

——これが、ナリーファが夜伽を決して務められない理由だった。

高貴な姫君とは、優雅な寝台でおしとやかに眠るのが当然と認識されている。いや、身分や性別に関係なく、寝相が悪くても許されるのは、せいぜい子ども時代までだろう。

ところがナリーファはどうした事か、いまだに寝相が凄まじく悪い。

それどころか、眠っている間に他人が近づくと、なぜか無意識に猛攻撃してしまうのだ。

幸か不幸か、この寝相は故国にいた頃にナリーファの身を守ってもくれた。

ナリーファが年頃になったある日の晩、後宮の隅に与えられた彼女の小さな寝所へ、暴行目当て

で一人の下男が忍び込んできた事がある。

しかし、男が熟睡しているナリーファに手をかけたところ、なんと眠ったままの王女が殴るわ蹴るわの猛反撃をした。男はしまいに盛大に投げ飛ばされて壁に叩きつけられ、物音で飛び起きた召使達に取り押さえられたのだ。

その数日後、再び別の男が忍び込んだが、まったく同じ目にあった。

『ナリーファ様にやられたんだ。大人しそうなそぶりでも、獅子みたいに凶暴な姫様だった』  
幾ら暴漢達にそう供述されても、ナリーファには一切の記憶がない。

武術の心得もないひ弱な王女が、力仕事を担う屈強な下男を眠りながら叩きのめしたなどと、一度目は誰も信じなかった。

だが二度目の暴行未遂の際に、決定的な証拠と証人が出た。

それは、メフリズに怯えながらも、ナリーファにこっそり親切にしてくれていた侍女である。

彼女が物音で真っ先に寝所へ駆け付けたところ、ナリーファがぐっすり眠りつつ、暴漢の股間を強烈に蹴り上げるところを目撃したらしい。

それどころか、ナリーファは心配して駆け寄ってきたその侍女まで、あわや蹴り飛ばす寸前だった。彼女の悲鳴で目が覚めたら、床に尻もちをついているその顔面すれすれに、爪先を突きつけていたのだ。

それでようやく、眠っている己のとんでもない行動を信じられた。

……とはいえ、これが表沙汰になる事はなかった。



普通なら、後宮に男が忍び込んだだけで大事件だ。しかし、『後宮に忍び込む男などいるはずがないでしょう。馬鹿げた嘘を吹聴する事は禁じます』という、正妃メフリズの命令で事件は一切不問にされ、父王に報告すらされなかったのだ。

それで皆、暴漢を手引きしたのはメフリズだと薄々ながら気づいた。人の口へ戸は立てられず、真相は正妃付きの侍女から召使達へこっそり広まった。

メフリズは、ナリーファを凌辱させてから、後宮へみだりに男を引き込んだふしだらな娘だと責めて処刑か追放するつもりだった。なのに、意外な展開になったために真相を追及されるのを避けて有耶無耶にしたのだ。

その結果、密かにナリーファへつけられたあだ名が『眠れる獅子姫』である。

そして、二度の失敗に業を煮やしたメフリズは、ウルジュランの悪名高い凶王シヤラフが後宮の女を酷く扱うという噂を聞き、そこに目をつけたのだった。

ナリーファが夜伽の際に眠り込み、凶王を蹴飛ばして殺されれば良いと嘲笑うメフリズの恐ろしい声は、今もすっかり覚えていいる。

(……ここに来る途中で眠った時も、いつも通りだったものね)

眠る環境が変わったとしても、これは変わらない。ミラブジャリードまでの道中で宿に泊まった翌朝も、相変わらず寝台はグチャグチャだった。

——そして『あの夢』も、変わらなかった。

(母様……)

うつすらとした夢の残滓を思い出していたナリーファは、扉を叩く音に我に返る。

「ナリーファ様、お加減は如何でしょうか？」

パリーの声に、改めて部屋の惨状を目にしたナリーファは慌てふためく。

このとてつもない寝相の跡を誰かに見られたら大恥だ。それに、万が一シヤラフの耳に入り、昨夜命令通りに眠ろうとしなかった理由や真相を問い詰められても困る。

ナリーファは黙っているのは得意でも、嘘を吐くのは全然得意ではないのだ。

もし相部屋に入れられていても困っていたはずだが、ナリーファはここに来たらすぐシヤラフに夜伽を命じられ殺されると思い込んでいたので、その可能性を忘れていた。

「あつ、あと、三分だけ！　すぐ開けるので、三分だけ待ってもらえるかしら!？」

上擦った声で返事をし、即座に部屋を整える。

ナリーファはミラブジャリードにいた頃、母が亡くなってすぐ部屋を移された。一応は王女という身分から個室だったが、鍵は外側にしかない牢獄のような粗末な部屋だった。

不規則な時間にメフリズ付きの意地悪な侍女の怒鳴り声で起こされ、扉を開けられてはグシヤグシヤの寝相の跡を嘲笑われたものだ。

掛け金がある扉と優しく待ってくれるこちらの侍女に感謝しながら、ナリーファは猛烈な勢いで敷布の端を引っ張って整える。そしてずれた寝衣の帯を直し、髪も簡単に手櫛で綺麗にした。

何とか形を取り繕った部屋を見渡し、ナリーファは深呼吸をして掛け金を外す。

「待たせてごめんなさい」

扉の前で待つていたパーリに謝ると、親切な少女はにこやかな笑顔でお辞儀をした。

「勿体ないお言葉です。私こそ、もう少しごゆっくりお休みになっていただければ良かったと……」  
そこまで言ったところで、パーリはふと室内を見て円らな目を見開く。

「あの、何か……？」

クッションも全て元通りにしたはずだが……と、内心ビクビクしつつナリーファが尋ねると、パーリが遠慮がちに口を開いた。

「寝台でしたら、私が責任を持って敷布も毎日替えて整えますので、どうかそのままになさってくださいませ」

端をきっちり折り折込み皺一つなくピンと伸ばした敷布を見て、ナリーファは己の失態に気づき、冷や汗を滲ませる。

敷布替えや部屋の掃除を、全て自分でやるのに慣れていたから手早く整えられたけれど、やり過ぎた。

ナリーファはこれまで冷遇されていたからそうせざるを得なかったが、普通は相部屋の寵姫の寝台だって侍女が整える。これではかえって、不思議に思われるはずだ。

「え、ええ……明日からは、お願いするわ」

今後は、適度に寝乱れた感じに整えようと、ナリーファは決意した。

そして、結局その日ナリーファは、部屋から一歩も出ずに過ごした。

『宜しければ、後宮のお庭や娯楽室を案内いたしますでしょうか？』と、パーリが申し出てくれたのだ

が、昨日の寵姫達の顔がちらつき、遠慮してしまったのだ。

なので夕刻まで、部屋にあった本を読んで過ごす事にした。

（好みでない寵姫にさえ、こんな二連続きの立派な部屋を惜しげもなく与えられるのは、陛下がそれだけ寵姫同士の諍いを嫌う故でしょうし……）

だったら、他の寵姫との接触は避けた方がいいだろう。

侍女が掃除をする時には、もう片方の部屋にいればいい。眺めの良い大きな窓は閉塞感を感じさせず、回廊側上部の小窓を開ければ、心地良い風が吹き抜ける。

しかも浴室と洗面所もあるので、寵姫は与えられた部屋から出ずとも快適に生活できるわけだ。寵愛を競う後宮の女性達も、顔を合わせる機会が少なければ諍いを起こす確率も自然と減る。

昨日の寵姫達のように、表面は友好的に交流しつつライバルを牽制する者もいるだろうが、ナリーファはそう器用ではない。

華やかで美しい寵姫達に馴染める自信がないなら、大人しく部屋に籠もるのが一番だ。

また、もう一つ重大な理由もあった。

ナリーファは寝台中を転げ回る寝相のせいとか、起きた後は激しい運動を終えた後のごとく疲れているのだ。

故郷のように毎日メフリズに呼び出されたりせず、ゆっくり休めるのは実にありがたい。やがて日が暮れ、夕食を済ませると、パーリが昨日と同様に湯浴みの支度をしてくれた。

「陛下が今夜も参られるそうですね」

ナリーファの髪を拭いてジャスミンのかぐわしい香油を塗りながら、パーリが嬉しそうに言う。その声には、ほんの少し驚いた雰囲気も混じっていた。

昨夜の敷布は汚れていなかったから、ナリーファがシャラフと一夜を過ごしても夜伽をしなかった事は一目瞭然だ。それなのに今夜も王が部屋を訪れるのを、パーリが不思議に思っても無理はない。

しかし余計な詮索はせず、パーリは支度を終えたと行儀良く退室していった。

(昨夜みたいに、上手くお話しできれば良いけれど……)

寢室に一人きりになると、急に不安が膨れ上がってきて、ナリーファは激しく動悸を打つ胸を衣服の上から手で押さえる。緊張からか、時間が過ぎるのがやけに遅く感じられた。

「ナリーファ様、陛下が参られました」

寢所の扉を叩く音と、昨日とは違う男性の声が聞こえた時、あやうくナリーファは悲鳴を上げそうになった。

「は、はいっ」

情けなく掠れた小声で返事をする、昨日と同じようにシャラフが扉を開ける。

昨日の彼は今にも噛み殺しそうなくらいにナリーファを睨んでいたのに、今夜は鋭かった目つきが随分と柔らかくなっていった。

苛立ちの気配もない姿に、やはり昨夜の彼は疲労の極致にあったのだと感じた。

「お、お待ちしておりました、陛下」

「ああ。今夜も話を聞かせてくれ」

急いでお辞儀をしたナリーファにかける声も、昨夜とは比べ物にならないほど穏やかだ。

今夜のシャラフの後ろには、武官の装いをした筋骨逞しい青年がいた。

「ご苦労だったな、カルン。もう下がっていいぞ」

シャラフが肩越しに振り返り、武官の青年に声をかける。

「は。失礼します、陛下」

ピシッと敬礼をしたカルンは、その体躯に相応しい大きな剣を装着しており、随分と迫力があつた。だが、短い黒髪の下に輝いている黒い瞳は、どこか愛嬌があり陽気そうな雰囲気に満ちている。

カルンが扉を閉めると、シャラフが真っ直ぐに近づいてきたので、ナリーファは反射的にギクリと身体を強張らしてしまった。

真正面に立ったシャラフが、鋭い瞳をナリーファへ向ける。

「今朝は、気づいてやれなくて悪かった」

「……？」

唐突に謝られ、ナリーファはポカンと口を開いてしまった。

「お前は昨夜、俺に遠慮して一睡もしていなかったそうだな？ 酷く疲れていたようだとパーリから聞いた。俺が一番に気づいてやるべきだったのに、自分が眠れた驚きで手一杯になっていた」

「陛下がお気になさる事では……私は自分の望みで起きていただけですので……」

焦ってナリーファが首を横に振れば、シャラフが苦笑する。

「今夜は無理をせず、俺の隣で寝ろ」

「えっ!？」

たじろぐと、シャラフが訝しそうな表情で首を傾げた。

「遠慮はいらん。夜伽に抵抗があるなら、無理強いする気もないぞ」

「いつ、いえ、それは……」

本当の事はとても白状できないし、かといって、とっさに上手い嘘など思い浮かばない。なので、正直にお願いする事にした。

「陛下の寛容なお心に、深く感謝いたします。ですが……私は、陛下のお傍では一晩中でも起きていたいのです。どうかお許しいただけませんでしょうか？」

眠ったら大変な事になるという考えで頭が一杯のナリーファは、自分の言葉がまるで、シャラフを健気に恋慕っているように聞こえるのにも気づかない。

見上げて懇願すると、彼は唐突に顔をしかめて口元を片手で覆い、そっぽを向いた。

せつかくの厚意を断って気を悪くさせてしまったかと、血の気が引いたが……

「そ、そうか。好きにしる。パーリーには言っておくから、昼間にゆっくり休めば良い」

何度か咳払いをした後、不愛想な声で言われ、ナリーファは目を見開く。

「あ……ありがとうございます」

いやあつて我に返り、精一杯の感謝を込めて礼を告げると、シャラフはそっぽを向いたまま無言で頷く。

上着と靴を脱ぎ捨てた彼は、腰の剣も外して脇に置き、寝台へ横たわった。そして手を伸ばし、片側に積まれたビロードのクッションから、適当なものを掴み取ってもたれる。

悠然と寝台上に寝そべるシャラフは、砂色の毛並みをした大きな豹が、周りの動物など意にも介さずゆったり寛いでいる姿を思わせた。

鋭い緑色の双眸は、恐ろしいけれども綺麗で、自然と目が吸い寄せられる。

「ナリーファ、来い」

手招きされ、ナリーファが寝台上上がると、シャラフはその膝に頭を載せて目を瞑り、ゆっくりと喋り出す。

「昨夜、お前が話した物語を、俺も子どもの頃によく聞いた。いつの間にかすっかり忘れていたが……とても懐かしかった」

「陛下も、あの話をご存じだったのですか？」

ナリーファの驚いた声に、シャラフが薄く目を開けた。

「ああ。俺の母親の生まれ故郷に古くから伝わる物語らしい。乳兄弟達と一緒にたびたび聞かせてもらったものだ。お前は、どこであの話を知った？」

彼の緑色の瞳に見上げられ、不意にドキリと心臓が跳ねる。怖くてドキドキするのは少し違う、なんだか不思議な感覚だった。

(そうだわ。陛下のお母君は、確か……)

シャラフの珍しい色をした髪と瞳は、母親譲りだという。彼女は既に故人だが、遠い西の国から

売られてきた女奴隷だつたと噂に聞いている。

昨夜、数ある物語からあの話を選んだのは、特に意図しての事ではなかった。だが、西の人間の特徴を持つ彼を見て、無意識に西の物語が喜ばれそうだと思つたのかもしれない。

「私も、幼い頃に母から教えてもらいました。母は……」

一瞬『踊り子など誰にでも媚びを売る卑しい女』と罵るメフリズの声が耳の奥に響いたが、ナリーファは言葉を続けた。

「……母は、後宮に上がる前は王宮専属の踊り子でしたので、西方の国からの使節団を迎えた酒席にて、余興で語られたのを聞いたそうです」

「シャラフは踊り子と聞いても侮蔑もせず」「そうか」とあつさり頷く。

「お前は物語の他に、母君から舞も習つたのか？」

「いいえ。母は早くに病で亡くなりましたし、あちらの正妃様が舞を好まれなかったので……宴席で聞いた面白い話は教えてくれても、舞を教えようとはしませんでした」

故郷の苦い思い出に、僅かに表情を曇らせてしまふ。すると、シャラフが軽く咳払いをした。

「余計な事を聞いたな……ところで、今夜はどここの国の話を聞かせてくれるんだ？」

「あつ……あの、今夜は、私が考えたものにしようかと思ひます」

どぎまぎしながら言えば、シャラフが興味深いものを見るような顔になった。

「お前は物語を語るだけでなくつくりもするのか？ それは楽しみだ」

「き、気に入っていただけると良いのですが……」

ナリーファは息を吸い、幾年か前に自分でつくつた物語を話し出す。

それは、本当は優しいのに恐ろしい外見で皆に避けられてしまう豹が、ふとした事から出会つた臆病な兎と、友情を育んでいく物語だつた。

先ほど寝台にゆつたり横たわるシャラフを見た時から、これにしようと思つていたので。

——今夜も、シャラフは物語を聞くうちに安らかな表情で眠り、ナリーファはその傍らで起きていた。緊張はまだあつたが、昨夜よりもずっと幸せな気分だつた。

それから、シャラフは毎晩ナリーファのもとへ来た。

長い話を幾晩かに分けて話す事もあれば、以前に話したものをまた求められる事もある。

しかし幸いにも、彼が求めるのはナリーファの物語だけで、夜伽は求めない。『気の進まない女を抱くほど飢えてはいない』と、初日に言つた通り、ナリーファはシャラフの好みとは、やはり異なるのだろうか。

そしてシャラフは、ナリーファが朝まで眠りたくないと言つたのもパーリに伝え、食事の時間なども昼間眠るのに合わせるようにしてくれた。

よつてナリーファは、朝、シャラフを送り出した後に朝食をとり、昼過ぎまで眠る。

相変わらず、起きれば寝台はぐちゃぐちゃだが、初日の失敗を踏まえて不自然でない程度に整えているので、パーリにも気づかれていない。

酷い寝相で疲れた身体を、読書をしながらゆつくり休め、夕食と湯浴みを済ませば、またシャラ

フが訪れる時間となる。

そんなわけで、ナリーファは部屋に籠もったまま他の寵姫とも会わず穏やかに過ごしていた。

——そして、二週間ほど経った晩。

「ナリーファ。お前に大事な話がある」

今日はすぐ寝転ばず、寝台に胡坐をかいて座り込んだシャラフが、やけに神妙な声で切り出した。「は、はい」

ナリーファが顔を強張らせ、恐る恐るシャラフの向かいで正座すると、彼はいつになく歯切れの悪い調子で話し始める。

「なんと言うかな……俺は、お前のおかげでよく眠れているわけだ。だから、まあ……正妃の座でも何でも、お前にやる。遠慮せずに欲しいものを言え」

もっと恐ろしい話かと思つて身構えたのに、そんな事を言われ、拍子抜けした。ナリーファは微笑んで首を横に振る。

「有難いお言葉ですが、既に何不自由ない暮らしをさせていただいている身です。これ以上の望みなどございません」

「くっ……お前はそう言んじゃないかと思つたが、その答えは却下だ」  
顔をしかめたシャラフに食いがられて、ナリーファは困った。

身の回りの品をろくに持たずに来たナリーファに、シャラフは美しい衣装や装飾品をたくさん贈つてくれている。必要最低限というには多すぎるほどだったが、寵姫に不自由させないのも王の

義務だから遠慮するなど言われ、恐れ多く思いながら受け取つた。

部屋に籠もつていても毎日美味しい食事をもらえ、花瓶に生ける綺麗な花も届けられる。書き物をする上等な道具も備わっているから、自分のつくつた物語を書き記してこっそり楽しんでもいい。これ以上望むものなど……と、目を泳がせて考えた末に、一つ思いつく。

「それでは、本を何冊かお借りできますでしょうか？」

「本？」

「はい。この部屋にあつた本は全て読み終えてしまったのです。こちらの王宮には立派な図書室があると聞いたので、宜しければと……」

だが、どんどんシャラフの顔が険しくなつていくのに気づき、ナリーファは声を萎ませた。

「ご迷惑でしたら、結構です。どうかお忘れください」

さっとひれ伏すと、シャラフが焦つた声を出す。

「迷惑ではない！ ただ、そんなささやかなもので良いのかと驚いただけだ。正妃の座でも良いと言っているだろう」

「そのような事はとても……お気持ちだけ有難くいただきます」

ナリーファは困惑して、しかめ面をしている彼を見上げた。

正妃の座なんて大それた願いを、ナリーファには冗談でも口にする勇氣はない。

シャラフは、どんな贅沢な願いでも遠慮なく申し出られるように言つてくれたのかもしれないが、本当にこれで十分だ。

しばしの沈黙の後、シャラフがぼそつと呟いた。

「……そうか。お前は、本が良いのか」

「せっかくお気遣いくださいましたのに、つまらない願ひ事で申し訳ございません」

どこことなくガツクリした彼の様子に、ナリーファは居た堪れなくなる。何でも願ひを叶えてやる  
と張り切っていたランプの魔人に、小物すぎる願ひをして落ちこませた気分だ。

「いや、気にするな。俺よりもスイルの方が蔵書に詳しいから、明日にでも選り抜きの本を用意さ  
せる。どんなものが好みだ？」

シャラフが気を取り直したように笑みを浮かべたのを見て、ナリーファも嬉しくなって自然と  
口元が綻ぶ。すると、胸の奥が温かくなると同時に、きゅうと締め付けられるような甘い痺れを感  
じた。

(あ……また……)

最近、シャラフにこうして笑いかけられるたび、こんな感覚に襲われる。覚えのない不思議な気  
持ちだったが、こういうものに似た表現を本で時々読んだ。

——それはナリーファが今まで経験した事がなかった、恋する気持ちだった。

「失礼します、ナリーファ様」

翌日の夕暮れ、ナリーファの部屋を二人の青年が訪れた。シャラフの側近である、文官のスイル  
と武官のカルンだ。

全然似ていない彼らだが、同じ両親から生まれた兄弟で、シャラフの信頼厚い乳兄弟だという。

ちなみに、スイルの方が兄でシャラフと同年、カルンは二つ年下らしい。  
シャラフが寝所まで護衛に伴うのは、大抵この兄弟のどちらかだ。彼らは時に、シャラフの言伝  
を届けにくる時もある。

「陛下の命により、こちらをお届けにあがりました」  
スイルが言い、カルンが両手で持った大きな木箱を差し出す。その中には様々な厚みの本が数十  
冊も入っていた。重たそうだが、屈強な体格のカルンは楽々と持っている。

「こんなに……」  
せいぜい五六冊のつもりでいたから、ナリーファは目を見開いた。

「陛下から伺ったナリーファ様のお好みを踏まえ、目ぼしい本を吟味して参りました。またいつで  
もご用意いたしますので、お気軽にお申しつけください」

涼やかな声でスイルが言い、無表情で優雅に礼をする。一方で、彼の隣にいるカルンはなぜか、  
笑いを堪えているらしき表情だった。真面目で堅い雰囲気崩さない兄と違い、彼は基本的に陽気  
な性質のようだ。

乳兄弟という間柄故か、彼はシャラフとさえも、ちよくちよく砕けた口調で話している。

「陛下も照れないではつきり言えば、自分より本を選ばれたと落ち込まずに済んだのに」

カルンが何か言っただけで、ナリーファはよく聞いていなかった。彼らの後ろから、猛烈な勢い  
でシャラフが走ってきたためだ。

「わっ、陛下！　なんでここに!？」

振り向いたカルンの手より、シャラフが木箱を奪い取った。

「本は俺が届けるつもりだったのに、お前が図書室から運んだと聞いて追ってきた。よもや、余計な事は言っていないだろうな？」

鋭い目つきをより物騒にしてカルンを睨んでいたシャラフは、ナリーファに目を留める。

「……お前の、寝衣でない姿を見るのは初めてだな。良く似合っている」

「こ、光栄にございます」

自分の頬がポツと熱を持つのを、ナリーファは感じた。

今身につけているのは、多色のビーズ飾りを縫い付けた若草色の衣服で、シャラフが贈ってくれたうちの一枚である。しかし、彼を寝所で迎える時はナリーファも寝衣に上着という姿だから、こうした普段着姿を見せるのは初めてだ。

一方のシャラフは、刺繍入りのカフタンとゆったりした下衣に腰帯を巻き、袖なしの上着を羽織っている。ナリーファにしても、シャラフの普段着の姿を見るのは初めてで、新鮮な感じだった。

シャラフはしばらくナリーファを上から下まで眺めていたが、急に慌てた様子で顔を背けると、重そうな木箱を楽々と居間に運び込んで隅に置いた。

「ありがとうございます、陛下。カルンさんに、スイルさんも」

ナリーファは三人に礼を言う。

「これくらいの望み、いつでも言え」

シャラフはそう笑ったが、直後、一転して表情を厳しくした。

「ナリーファ。俺はこれより二週間ほど多忙で、王宮を留守にする日も多くなる。しばらくここにも来られないだろう。その間は後宮の警備を増やすが、お前は日中も、部屋を一步たりとも出るな。口にするものは、その場で毒見されたもの以外は禁止だ」

「は、はい。かしこまりました」

有無を言わせぬ強い口調の命令に気圧され、嚴重すぎる警戒に疑問を抱く余地もなく、ナリーファは頷く。

「陛下……」

何か言いたげなカルンを、シャラフが鋭く睨みつけて黙らせる。素早く踵を返した彼は、不愛想な声で言い放った。

「スイル、行くぞ。カルン……少しくらいのお喋りなら許してやるが、なるべく早く戻ってこい」

「ではナリーファ様、失礼いたします」

スイルが淡々とお辞儀をし、既に回廊を歩き出していたシャラフの後を追う。

居間の真ん中に立ち尽くしたままそれを見送ったカルンは、肩を竦めて扉を閉めると、ナリーファに向き直る。

「いきなりで驚いたでしょう。部屋に軟禁同然とは、正直どうかと思いますが……陛下はこの後宮を過去に二回も、大事な存在を留守中に殺されているんです」

溜め息交じりに告げられ、ナリーファは驚いた。



「そのような事が……」

「一度目は陛下がまだ少年の頃、狩りの訓練で野営に出ている間に飼い猫が溺死させられました。そして数年後の討伐遠征中、母君が毒殺されたんです。どちらも証拠は消されてしまいました。陛下の異母兄の一人が母親と共謀してやったと、俺達は知っていました」

苦い声で語るカルンの言葉を、ナリーファは呆然と聞いていた。シャラフの母が故人とはわかってはいたが、そんな事情は知らなかった。

異母兄の母という事は、後宮の住人だ。ここに来た初日に女官から、寵姫の嫌がらせを手伝った宦官達を、シャラフが追い出したと聞いたのも思い出す。

今の話の後では、彼が寵姫の争いやそれを助長する者達を酷く嫌悪するのも頷ける。

「件の異母兄はもうこの世にいませんが、国王なんてどうしても恨みを買う職業です。特に陛下は、王位決闘で助命を願った異母兄達へ慈悲をかけたせいで、古参の家臣の幾人かにも苦々しく思われていますから。万全の守りを固めたいのでしよう」

「お兄様方へ慈悲をかけて、苦々しく思われるのですか……?」

理解しがたくて聞き返すと、カルンが顔を曇らせた。

「ナリーファ様はやはり、ウルジュランで新王の即位時に、王の異母兄弟は処刑される、という法をご存じないようですね」

「処……っ!？」

物騒な単語に思わず悲鳴を上げかけ、ナリーファは慌てて両手で口を覆った。

「昔、王の異母兄弟が内乱を起こす事が続いたせいで、国の安定のためという名目で決められたんです。建前では一応、病死や自害と公表されますが、この近隣の国では公然の秘密ですよ。ただ、ミラブジャリードくらい遠いと、正確には伝わっていないんじゃないでしょうか」

「え、ええ……存じませんでした」

「陛下は王座についてから、異母兄のうちの三人を、僧院に行くのを条件に助命しました。それで、国を不安定にする火種を残したと、陰で文句を言う者もいます」

とんでもない事実には、ナリーファは絶句する。

それでは、シャラフは王座を得るしか生きる道がなかったわけだ。残酷なのは彼ではなく、この国のやり方ではないか。

さらにカルンは、シャラフが即位後に、前王の老齢に付け込み暴利を貪っていた家臣や役人を王宮から一掃した事、王宮を追われ逆恨みした彼らから悪意に塗れた噂を流された事も教えてくれた。シャラフが王位決闘にて見せた驚異的な強さや気骨は周囲を十分に怯えさせたし、苛烈で残酷な凶王という話題を無責任に楽しむ者も多い。面白おかしく語られる間に尾ひれがついてしまったそうだ。

「ナリーファ様はもう承知してくださっていると思いますが、陛下は絶対に理不尽な暴君じゃありません。だから俺と兄貴は、陛下に一生ついていくと決めたんです」

真剣な顔で言うカルンを前に、ナリーファは消え入りたくなるほどの羞恥に襲われる。

ナリーファとてシャラフに初めて会った時、不機嫌そうで辛辣な口調の彼を恐ろしく思った。

でも、彼と半月も毎晩過ごす中で、髪一筋も傷つけられた事はない。彼が側近兄弟の他、衛兵やパーリと話す姿を見る機会があったが、一度も横暴な態度をとっていないかった。会った事もないシャラフの悪評を、鵜呑みにしていた自分が恥ずかしい。

「教えてくださって、ありがとうございます」  
消え入りそうな声で、ようやくそれだけ言えた。

「いえ。黙っていられないだけです。お節介すぎると陛下と兄貴によく怒られるのですが」  
カルンが苦笑し、一礼して部屋を出る。彼と入れ違いに、新しい花を生けた花瓶を手にしたパーリが戻ってきた。

「回廊にも中庭にも衛兵の方しかいないので、静かすぎてちよつと怖いくらいです」  
パーリが閉めた扉を振り向いて言う。そこでナリーファは、起きた時から何となく覚えていた違和感の正体によく気づいた。

毎日自室から出ないで過ごしていても、時おり部屋の前を通り過ぎる寵姫達のお喋りする声や笑い声が微かに届いてくるのに、今日はそれらが一度も聞こえない。

許可が下りるまで部屋から出ないという命令は、既に他の寵姫達にも通達されているようだ。ナリーファ一人が特別なわけではなく、ここにいる女性は皆、シャラフの大切な寵姫なのだから。

「今しがた、陛下からしばらく部屋を出ないようにと伺ったわ」  
ナリーファは微笑み、部屋の隅に置かれた木箱に視線を向けた。

どのみち他の寵姫と顔を合わせる事に怖気づいている以上、禁じられずとも部屋を出なかつたらうが、あれだけ面白そうな本があれば退屈する事もない。

国王の命令なら、侍女に伝言させるか紙一枚の通達でも良いはず。なのに、多忙な身ながらわざわざ自分で告げに来てくれたシャラフに、深く感謝した。